

NEWS RRM

[ニューズ] Regional Resource Management



兵庫県豊岡市竹野町
「おまき桜」

桜が咲くころ

教授 山室 敦嗣

桜が咲くかと思うかべる本がある。それは、鳥越皓之「花をたずねて吉野山―その歴史とエコロジー」(集英社、二〇〇三年)である。

奈良県の吉野山は桜の名所として知られ、三万本ともいわれる桜が全山をおおっている。その桜は自然に群落を形成したわけではなく、すくなくとも平安期にまで遡れるほど古い時代から桜を植え続けてきた結果、一面の桜の山と化した。鳥越氏は環境民俗学の立場から、人びとが吉野山を桜の園に変えてしまったわけを次のように考察している。吉野の山は大和平野の水源の山で、古くから水を司る神の住まう山という信仰があり、中世の荘園制が形を整えるのにもなって自律性を高めた農民による村落共同体が確立し、特定の政治的支配層だけではなく農民も雨乞い祈願のために吉野の山へ向かうようになった。その祈願にあたって桜の苗木を手向けたであろうと鳥越氏は想定し、「農民たちによる水を差配する神への信仰が、吉野山を一面の桜にする基本的原因となった」と述べる。その後、近世にかけては桜を見物するために訪れる人びとも多くなり、桜の苗木の寄進も続くが、近代に入ると信仰の側面は後方に退き、観光客を見込んで桜の木を保全する環境運動が登場してきたという。この地域の生活と桜との関わりは、信仰・観光・環境という三つの要素が重なって存在し、一番底に信仰が、もっとも新しい傾向として環境が表面にでているものの、その全体が桜の山という華やかな風景を保全する力になっていると指摘している。

じつは鳥越氏は私の大学院生時代の恩師で、先生はその当時、人間と自然との合力に

よって創造された「自然の華やぎ」について考察を深めるため、吉野山の桜の研究を進められていた。私はその研究にふれるまで、吉野山を桜がたくさん咲く観光地といった程度の理解で済ませていたが、調査に同行する機会にも恵まれ、桜の山の形成に信仰や農事の民俗が大きく関わっていることを知らされた。民俗学の研究が明らかにしているように、民衆にとつて桜の開花は、種まきなど農作業の暦や、その咲き方・散り方を通して作物や暮らしの豊凶を占う役割などをもっていたようである。もちろん、私も含めて現代の日本社会に暮らす多くの人は、桜の開花というよりもつばら花見での鑑賞や宴会になりがちで、その開花を農事と結びつけたり、信仰心をもって見たりということは難しいだろう。とはいえ、案外、桜をめぐる民俗は、私たちが暮らしている地域に息づいているのではないだろうか。日本の各地には、桜と地域生活との深い関わりを味わえる場所が数多くある。私が暮らす兵庫県豊岡市にも、「おまき桜」と呼ばれている樹齢およそ五〇〇年の桜がある。この桜はエドヒガンという自生種で、花期は四月下旬である。麻を播く時期をたがえず咲くので、その命名されているという(「竹野町史 民俗・文化財・資料編」)。

桜が咲くころは、桜と地域生活とのこれまでの結びつきを知る好機である。このことは、私たちが自然とこれからのような関係をつくっていくのか、について思いを巡らす良い機会だといえる。

Information

2020年度 オープンキャンパス

Information 01

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科の受験を考えている方や、大学院の取り組みに興味がある方に向けて、下記の日程でオープンキャンパスを開催します。オープンキャンパスでは大学院や入学試験の概要を紹介し、施設や展示を解説付きでご案内します。また、オープンキャンパスの開催日を含む前6日間、個別相談を毎日受け入れます。随時受付しておりますので、希望日時と話を聞きたい教員を大学までお知らせください。

●オープンキャンパス

春のオープンキャンパス	夏のオープンキャンパス	秋のオープンキャンパス	冬のオープンキャンパス
5月31日(日)	7月12日(日)	10月18日(日)	12月20日(日)
個別面談 5月26日(火)～ 5月31日(日)	個別面談 7月7日(火)～ 7月12日(日)	個別面談 10月13日(火)～ 10月18日(日)	個別面談 12月15日(火)～ 12月20日(日)

2021年度 入学生募集

Information 02

博士前期課程(全日程合わせて定員12名)、博士後期課程(全日程合わせて定員2名)の入学試験を実施します。日程は、博士前期課程は8月末、12月中旬、3月上旬の3回、博士後期課程は8月下旬、3月上旬の2回を予定しています。

試験内容は専門試験(小論文)と口述試験です。会場は豊岡ジオ・コウノトリキャンパス(豊岡会場)と神戸商科キャンパス(神戸会場)から選ぶことができます。

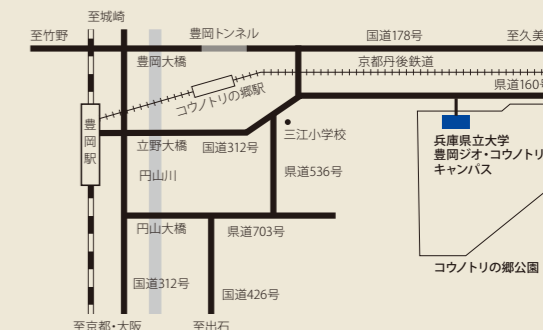
[お問い合わせ] 各催しの詳細はウェブサイトをご覧ください。あるいはメール、電話にてお気軽にお問い合わせください。



兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 RRM

〒668-0814 豊岡市祥雲寺128
(兵庫県立コウノトリの郷公園内)
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
Tel. 0796-34-6079 Fax. 0796-22-5200
E-Mail: rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp

<http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm/>



【写真提供】

正木 詔一 : おまき桜(兵庫県豊岡市竹野町)
岡田 誠 : 千葉セクションにおけるGSSP層位と地磁気逆転境界
杉本 宏 : 宇治のまち風景
菊池 義浩 : 復興建築の例(三戸一の建物)
佐野 恭平 : みんなの発表会 会場の様子



UNIVERSITY OF HYOGO

発行:2020年 3月

「地磁気の逆転とチバニアン」報告

岡田 誠 (茨城大学理学部 教授)

2020年1月17日、かねてより審査中であった日本初のGSSP (Global Boundary Stratotype Section and Point: 国際境界模式層断面とポイント) 提案が国際地質科学連合によって承認された。この結果、名称未定であった中期更新世がチバニアン期(77・4万年前〜12・9万年前)と命名され、地球史に初めて日本の地名が刻まれることになった。第16回サイエンスカフェRRMの講演会に来て下さった皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。

地球の歴史は、地層が記録する化石の種類や気候変動の変化などをもとに116の地質時代境界で区分されている。それぞれの境界は、その時に起こったことの痕跡が世界で最もよく保存されている地層(GSSP)によって定義され、これまでチバニアンを含め74箇所が認定されてきた。今回審査のあった前期・中期更新世境界は最後の地磁気逆転(Matuyama-Brunhes 境界)が目安となっていたので、GSSPでは地層中に磁場逆転の様子がはっきりと記録されている必要がある。千葉セクションは他の候補地であったイタリアの2箇所と比べ、地磁気逆転記録が圧倒的に優れていた。

そもそもどのように地層が地磁気を記録するのだろうか？地層は海の底に泥の粒が堆積することである。そして泥の粒の中には磁石の性質を持つ粒(ほとんどが磁鉄鉱と呼ばれる酸化鉄)も沢山入っている。泥が海底に堆積する時、個々の磁鉄鉱の粒のN極の向きが地磁気の方向に引く張られ、地磁気の方向に揃う。このため、泥岩を感度の高い磁力計で測定することで、堆積した時の地磁気の方向を知ることが出来る。つまり地層の中にある磁鉄鉱の粒が、当時の地磁気の方向を覚えてくれるのだ。

千葉セクションでは、地磁気逆転境界の1・1m下に白尾火山灰層と呼ばれる厚さ1cm程度の白い火山灰層が見られる。この火山灰層の下面が、GSSPとして前期・中期更新世境界(チバニアン期・カラブリアン期の境界)を定める世界基準となったのである(図)。



図: 千葉セクションにおけるGSSP層位と地磁気逆転境界

地域の個性と文化的景観

杉本 宏 (京都造形芸術大学歴史遺産学科 教授)

文化的景観を形成しているのはそこに住む人たちの生活・活動そのものであり、文化としての経験知であり、暗黙知がその基盤となっている、と思っている。したがって、伝承されてきた地域の生活や生業に関する文化・伝統などは、そこに住む一人ひとりに内在する経験知を継承する力がどれほど保たれているかが大事で、そのシステムが健全であれば地域文化は健全性を維持し、自ずと文化的景観は継承され磨かれ、個性を継承する地域景観として表れてくる。

文化的景観を価値づける地域の個性は、具体的にはどこに宿るのか。例えば京町家と宇治町家は外観的には全く同じである。しかし部分に拘ってみると、玄関引戸の敷居は、京町家では水除けのため一段高いのが普通だが、宇治町家はフラットかわずかな段差しかないものが多い。宇治の町家は、かつて茶農家の家宅であることが多く、玄関から通り庭を突き抜ける必要からだった。また、出格子を見ると、京町家では敷地内にその出が収まるが、宇治町家では敷地からはみ出し道の側溝の上に出格子がくる。軒はさらにはみ出し、道の上に覆いかぶさる。これは、江戸時代、茶産業の立役者の茶師の門は長屋門であったことに関係する。長屋門は敷地ぎりぎり建てられ、軒の短い屋根の雨だれが道の側溝に落ちるようになっていた。宇治の通りにはこの長屋門が数十軒も並んで建てられ、間に町家が

建てられた。結果、町家も壁を長屋門にそろえるため家を敷地ぎりぎりに建てる事が作法となった。そして、出格子も軒も大きく敷地外へとはみ出した。宇治町屋と京町家との僅かな違いには、伝統的な茶業と歴史とがある。すなわち個性なのだ。

おそらくこのような個性は、各ディテールの中からたくさん見つけ出すことができるはずだが、普段、私たちは何も気にしていない。日常とは「全体」の中で暮らしている、ということだからそうなる。文化的景観の取り組みの目的は地域らしさの維持と持続にあり、目標は地域の素顔に魅せられた人の共感を広く大きくするにある、と思っている。

地域の何気ない素顔に魅せられてゆく、とは、こんなようなことを手掛かりにしているように思える。そしてそれが地域を救う力となってゆく。



写真: 宇治のまち風景

《教員の研究紹介》

災害復興とまちづくり

講師 菊池 義浩

(農村計画・都市計画)

日本は豊かな自然環境に恵まれていますが、その自然的条件から災害が多発する国土といえ、数々の自然災害による被害を受けてきました。そのたびに人々は安全性の向上を図りながら集住空間を再形成してきており、被災と復興の記憶は、現在の集落や町並みのかたちに反映されていると捉えることもできます。

このことは但馬地域も例外ではなく、大正14年に発生した北但馬地震(以下、北但大震災)により豊岡町や城崎町(現豊岡市)は甚大な被害を受けました。私は北但大震災の復興計画とその後の町並みの変遷について、地元出身のまちづくり活動・研究に取り組まれている松井敬代氏(豊岡まちなみ連盟・事務局次長)と協力して調査を進めており、ここではその一端として豊岡町の事例を紹介します。

豊岡町では、明治42年に鉄道が敷設されて豊岡駅が開業し、大正期に入ると「大豊岡構想」と呼ばれる近代都市計画が進められています。円山川治水、丹但鉄道建設、上水道の整備などが取り組まれ、耕地整理法を活用した市街地と道路整備により、現在まで続く市街地の骨格が形成されました。北但大震災はこの計画が進行していた最中に発生し、多くの家屋が地震による倒壊や、その後に発生した火災で被害を受けています。豊岡町では住宅再建にあたり、鉄筋コンクリートで建設する場合には補助金を出しており、防火帯としての機能を大豊岡構想の中に付加

しています。豊岡町の復興計画は、近代化に向けた大規模な開発計画をベースとして推進されたもので、成長社会の情勢下における復興手法とも言えるでしょう。

豊岡市教育委員会文化財室では、平成26年に「豊岡復興建築群」調査を行っており、その結果を踏まえながら、北但大震災の復興において建設された鉄筋コンクリート造住宅(写真)の調査を実施しました。新たに把握した建物を含めて22棟(計38戸、既に取り壊されている建物を含む)の存在が確認でき、現在はこれらの建物がどのように継承されてきたのかを明らかにすることで、まちのヒストリーを描き出せればと研究に取り組んでいるところです。

被災から90年以上が経過した今日、近代都市計画および復興計画で形成され、受け継がれてきた町並みや建築群は一つの地域資源と捉えられます。このような既存ストックを上手く活用することで、集住空間に新たな価値を生み出すていくことは、縮退社会における重要な計画課題でもあるのです。



写真: 復興建築の例(三戸一の建物)

みんなの発表会報告

2月9日

山陰海岸ジオパーク第3回みんなの発表会に参加して

原田 正信 (博士前期課程1年)

豊岡も暖冬であったか日々が続いていきましたが、急に寒波がやってきたようで、当日は手足も凍えるような寒い朝となりました。早朝から豊岡稽古堂では、山陰海岸ジオパーク推進協議会の方々、地域資源マネジメント研究科の先生方や大学院生、事務の方々がお集まりで準備を整えておられました。私も準備に加わり、参加者の皆さんをお出迎えしました。会場にはポスター発表のためのパネルが設置され、地元の方々のガイドのガイドの方々をはじめ、地域で日々活動している方々の活動報告や研究成果をまとめたポスターが次々と掲示されていきました。

当日の発表は、発表者がスライドを使って取り組みを紹介する口頭発表と、ポスターを前にして参加者へ向けて発表を行うポスター発表の2形式で行われました。口頭発表では、午前の部は8名、午後からは10名の発表がありました。環境問題を軸にした温暖化に関する取り組みや、資源の保全や防災、楽しさと魅力満載のジオツーリズムなど多様な分野にまたがる発表に、高校生からもさかんに質問がありました。身近な問題提起や新たな取り組みの提案の後には、共感する力強い声なども聞かれました。SDGsや国際法と地域とを結びつけるお話や、ユニバーサルデザインのようなグローバルなテーマと地域の取り組みを結びつける話題も、身近な話題としてわかりやすく紹介されていたのが印象的でした。村おこしの活動報告では但馬牛・日本海の魚介類、野菜や果物の話題に舌鼓をうちながら、私が暮らしているのは豊かな食材に恵まれた地域であると、あらためて実感しました。

昼食時にはポスター発表が行われ、昼食そっこの中で、発表する人、説明に聞き人ったり、熱心にポスターや展示物をのぞき込む人で、会場は常に熱気にあふれていました。合計50名ほどの参加者で、盛会のうちに終了しました。発表会終了後も参加者がみんなで会場片づけにあたり、その間も意見・情報交換が盛んに行われました。発表会後の懇親会でも活発な意見交換は続き、ジオパーク関係者の熱い思いを聴くことができました。

初めて参加したみんなの発表会でしたが、研究者や活動に携わっている方々、地域の住民や学生の「人の結びつき」の強さを感じ、これからのさらなる活性化が大いに望めるという印象を持つことができました。今後自分も何らかの形で、少しでも貢献できたらと感じています。



写真: みんなの発表会 会場の様子